

学術フロンティア講義 (S セメスター) 近似を厳密に考える

2. 方程式の解を求めること

齊藤 宣一 (さいとう のりかず)
数理科学研究科 norikazu@ms.u-tokyo.ac.jp

2019 年 6 月 27 日 (木) 5 限 521 教室



Graduate School of Mathematical Sciences
THE UNIVERSITY OF TOKYO

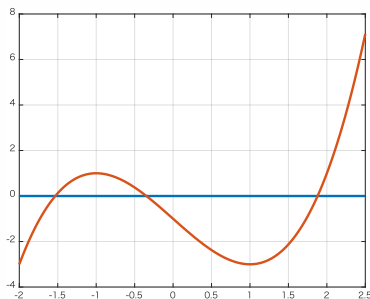
予定

- 6月6日 (齊藤宣一) 1. 積分の値を求めること
- 6月13日 (河澄響矢)
- 6月20日 (河澄響矢)
- 6月27日 (齊藤宣一) 2. 方程式の解を求めること ← 本日
- 7月4日 (齊藤宣一) 3. シミュレーションと多角形の形

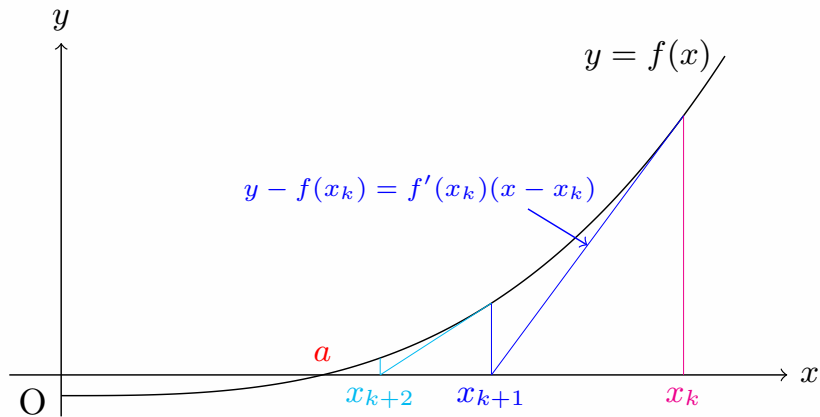
今回のテーマ

関数 $f : \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$ に対して、方程式 $f(a) = 0$ の解 a を求めたい。

- a を求めるための解の公式は (一般には) 存在しない。また、解の公式がある場合も、実用的な価値があるかどうかは別問題。
- 一般的な手順としては、反復列 $\{x_0, x_1, x_2, \dots\}$ で、 $x_k \rightarrow a$ ($k \rightarrow \infty$) となるものを構成し、十分大きな k に対して、 x_k を a の近似値として採用する。



代表例：Newton 法



$$x_{k+1} = x_k - \frac{f(x_k)}{f'(x_k)}$$

代表的な反復解法

Newton 法

$$x_{k+1} = x_k - \frac{f(x_k)}{f'(x_k)}$$

$y = f(x)$ の $x = x_k$ における接線 $y - f(x_k) = f'(x_k)(x - x_k)$ と x 軸との交点を x_{k+1} としている。

簡易 Newton 法

$$x_{k+1} = x_k - \frac{f(x_k)}{f'(x_0)}$$

この方法では、毎回 $f'(x_k)$ を計算する必要がない。

緩和反復法

$$x_{k+1} = x_k - \lambda_k f(x_k) \quad (\lambda_k: \text{定数})$$

Newton 法では $\lambda_k = 1/f'(x_k)$ 、簡易 Newton 法では $\lambda_k = 1/f'(x_0)$ としている。

収束定理

細かい仮定は省略するが、次が成り立つ。

定理 (局所収束性)

Newton 法と簡易 Newton 法は、求めたい解 a の十分近くに初期値 x_0 をとれば、必ず収束する。

定理 (簡易 Newton 法の収束の速さ)

$g(x) = x - f(x)/f'(x_0)$ とおくと、 $\lim_{k \rightarrow \infty} \frac{x_{k+1} - a}{x_k - a} = g'(a)$.

定理 (Newton 法の収束の速さ)

$g(x) = x - f(x)/f'(x)$ とおくと、 $\lim_{k \rightarrow \infty} \frac{x_{k+1} - a}{(x_k - a)^2} = \frac{1}{2}g''(a)$.

問題 1

どちらの収束が速いだろうか？ 理由は？

2変数のNewton法

2元の連立方程式:

$$f(x, y) = 0, \quad g(x, y) = 0$$

2変数のNewton法

$$\begin{pmatrix} x_{k+1} \\ y_{k+1} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x_k \\ y_k \end{pmatrix} - \begin{pmatrix} f_x(x_k, y_k) & f_y(x_k, y_k) \\ g_x(x_k, y_k) & g_y(x_k, y_k) \end{pmatrix}^{-1} \begin{pmatrix} f(x_k, y_k) \\ g(x_k, y_k) \end{pmatrix} \quad (*)$$

実行の際には、逆行列を構成するのではなく、連立一次方程式

$$\begin{pmatrix} f_x(x_k, y_k) & f_y(x_k, y_k) \\ g_x(x_k, y_k) & g_y(x_k, y_k) \end{pmatrix} \begin{pmatrix} w_1 \\ w_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} f(x_k, y_k) \\ g(x_k, y_k) \end{pmatrix}$$

を解いてから、

$$\begin{pmatrix} x_{k+1} \\ y_{k+1} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x_k \\ y_k \end{pmatrix} - \begin{pmatrix} w_1 \\ w_2 \end{pmatrix}$$

とする。

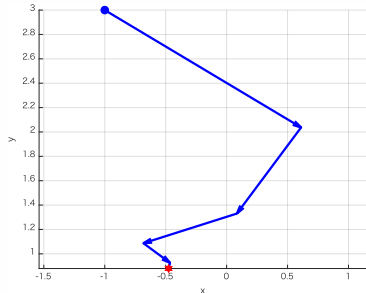
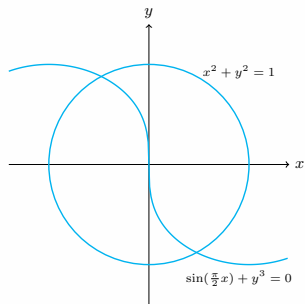
例

連立一次方程式

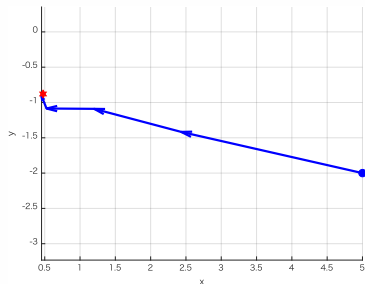
$$f(x, y) = x^2 + y^2 - 1 = 0,$$

$$g(x, y) = \sin\left(\frac{\pi x}{2}\right) + y^3 = 0$$

を解いてみる.



初期値 $(-1, 3)$



初期値 $(5, -2)$.

複素 Newton 法

2 元の連立方程式:

$$f(x, y) = 0, \quad g(x, y) = 0$$

2 変数の Newton 法

$$\begin{pmatrix} x_{k+1} \\ y_{k+1} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x_k \\ y_k \end{pmatrix} - \begin{pmatrix} f_x(x_k, y_k) & f_y(x_k, y_k) \\ g_x(x_k, y_k) & g_y(x_k, y_k) \end{pmatrix}^{-1} \begin{pmatrix} f(x_k, y_k) \\ g(x_k, y_k) \end{pmatrix} \quad (*)$$

$z = x + iy$ とおき、連立方程式を次のように書く：

$$u(z) = f(x, y) + ig(x, y) = 0$$

複素 Newton 法 反復列 $z_k = x_k + iy_k$

$$z_{k+1} = z_k - \frac{u(z_k)}{u'(z_k)} \quad (**)$$

複素微分 (複素関数としての微分)

$$u'(z) = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{u(z+h) - u(z)}{h} \quad (z, h \in \mathbb{C})$$

2変数のNewton法と複素Newton法

定義 (正則関数)

定義域 $D \subset \mathbb{C}$ の全ての点で複素微分可能な複素関数 $u(z)$ を正則関数という。

定理 (Cauchy–Riemann の方程式)

$u(z) = f(x, y) + ig(x, y) : D \rightarrow \mathbb{C}$ について次は同値：

- (i) $u(z)$ は正則関数
- (ii) $f(x, y)$ と $g(x, y)$ が共に (x と y の実数値関数の意味で) 全微分可能であり, Cauchy–Riemann 方程式 $f_x = g_y, f_y = -g_x$ を満たす。

定理

$u(z)$ が正則関数ならば, (*) と (***) は同値である。

注意

f, g が C^1 級であれば, 2変数のニュートン法 (*) は適用できる。しかし, Cauchy–Riemann 方程式がないと, 複素ニュートン法 (***) は適用できない。

代数方程式の解法

n 次の代数方程式

$z = x + iy$, $i = \sqrt{-1}$, $c_i \in \mathbb{C}$ ($i = 0, \dots, n$) に対して,

$$\begin{aligned} f(z) &= z^n + c_1 z^{n-1} + c_2 z^{n-2} + \cdots + c_{n-1} z + c_n \\ &= (z - a_1)(z - a_2) \cdots (z - a_n) = 0 \end{aligned}$$

の n 個の複素根 a_1, \dots, a_n を求める.

方法 1. 複素ニュートン法

$$z^{(k+1)} = z^{(k)} - \frac{f(z^{(k)})}{f'(z^{(k)})}$$

の適用が考えられる. ただし, $f'(z)$ は複素変数 z に関する微分を表す. ある近似根 a が求まったら, $f(z)/(z - a)$ に対して, 再び複素ニュートン法を適用すれば良い.

代数方程式の解法

方法 2.

$$f'(a_j) = \prod_{i \neq j} (a_j - a_i)$$

と言う関係に着目しよう。もし、 a_j に対する十分良い近似値 z_j が得られているならば、 $\prod_{i \neq j} (z_j - z_i)$ は、 $f'(a_j)$ の十分良い近似値になっていることが期待できる；

$$a_j \approx z_j \quad \Rightarrow \quad f'(a_j) \approx \prod_{i \neq j} (z_j - z_i)$$

したがって、すべての根を同時に求める趣旨で、反復列 $z^{(k)} = (z_1^{(k)}, \dots, z_n^{(k)})$ を、

$$z_j^{(k+1)} = z_j^{(k)} - \frac{f(z_j^{(k)})}{\prod_{i \neq j} (z_j^{(k)} - z_i^{(k)})} \quad (j = 1, \dots, n) \quad (\text{DK})$$

で生成する。これを、デュラン (Durand)・ケルナー (Kerner) 法、あるいは、連立法と言う。

初期値の選び方

$z^{(0)} = (z_1^{(0)}, \dots, z_n^{(0)})$ としては, n 個の解 a_1, \dots, a_n を含むような複素平面上の円盤 $|z - \beta| \leq R$ を構成し, 円周上を等分割した点

$$z_j^{(0)} = \beta + R \exp \left[i \left(\frac{2\pi(j-1)}{n} + \gamma \right) \right] \quad (j = 1, \dots, n)$$

を採用することが多い. γ は適当な実数である.

命題

$f(z) = z^n + c_1 z^{n-1} + c_2 z^{n-2} + \dots + c_{n-1} z + c_n = 0$ の n 個の根 a_1, \dots, a_n は,

$$\Gamma = \{z \in \mathbb{C} \mid |z| \leq 1 + \eta\}$$

の中に含まれる. ただし, $\eta = \max_{1 \leq k \leq n} |c_k|$.

注意

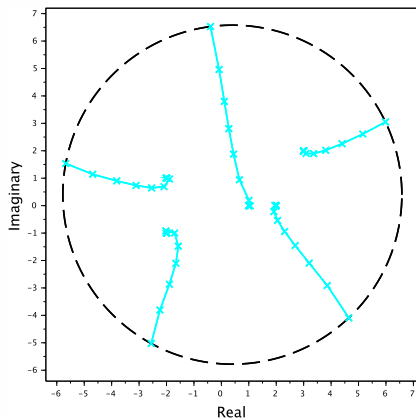
命題の評価はかなり荒いものである. もう少し精密な R と β の導出方法 → [齊藤 2017] の §1.6 を見よ

例

方程式

$$f(z) = z^5 - 2(1+i)z^4 - 2(4+i)z^3 + 2(4+5i)z^2 + (31+14i)z - 30 - 20i = 0$$

の根を DK 法で求める。根は $-2 \pm i, 1, 2, 3 + 2i$ の 5 つである。



基本対称式と根と係数の関係

- n 個の変数 z_1, \dots, z_n
- m 次の基本対称式 $\varphi_m(z_1, \dots, z_n)$ ($0 \leq m \leq n$):

$$\varphi_0(z_1, \dots, z_n) = 1;$$

$$\varphi_1(z_1, \dots, z_n) = z_1 + \dots + z_n;$$

$$\varphi_m(z_1, \dots, z_n) = \sum_{i_1 < i_2 < \dots < i_m} z_{i_1} z_{i_2} \dots z_{i_m} \quad (1 < m < n);$$

$$\varphi_n(z_1, \dots, z_n) = z_1 z_2 \dots z_n.$$

$f(z) = 0$ の n 個の根 $\mathbf{a} = (a_1, \dots, a_n)$ は、**根と係数の関係**により、

$$p_i(a_1, \dots, a_n) \stackrel{\text{def.}}{=} (-1)^i \varphi_i(a_1, \dots, a_n) - c_i \quad (1 \leq i \leq n).$$

したがって、 \mathbf{a} を求めるために、次の連立非線形方程式を考える：

$$\mathbf{p}(\mathbf{z}) = \begin{pmatrix} p_1(z_1, \dots, z_n) \\ \vdots \\ p_n(z_1, \dots, z_n) \end{pmatrix} = \mathbf{0}$$

複素連立 Newton 法

複素連立 Newton 法

$$\mathbf{z}^{(k+1)} = \mathbf{z}^{(k)} - [D\mathbf{p}(\mathbf{z}^{(k)})]^{-1}\mathbf{p}(\mathbf{z}^{(k)}) \quad \left[D\mathbf{p}(\mathbf{z}) = \left(\frac{\partial p_i}{\partial z_j}(\mathbf{z}) \right) \right]. \quad (\text{C})$$

命題

複素連立 Newton 法 (C) の各成分は (DK) の形に書ける。

証明. $Q(z) = (z - z_1) \cdots (z - z_n)$ とおくと,

$$\begin{aligned} \frac{\partial Q}{\partial z_j}(z_i) &= \begin{cases} -(z_i - z_1) \cdots (z_i - z_{i-1})(z_i - z_{i+1}) \cdots (z_i - z_n) & (i = j) \\ 0 & (i \neq j) \end{cases} \\ &= -Q'(z_i)\delta_{ij}. \end{aligned}$$

ここで, もちろん,

$$Q'(z_i) = (z_i - z_1) \cdots (z_i - z_{i-1})(z_i - z_{i+1}) \cdots (z_i - z_n) = \prod_{j \neq i} (z_i - z_j).$$

命題の証明の続き

一方で、 $Q(z) = z^n + b_1 z^{n-1} + \cdots + b_{n-1} z + b_n$ と書けば、

$$\frac{\partial Q}{\partial z_j} = \left(\frac{\partial b_1}{\partial z_j} \right) z^{n-1} + \cdots + \left(\frac{\partial b_{n-1}}{\partial z_j} \right) z + \left(\frac{\partial b_n}{\partial z_j} \right).$$

ところで、 $b_i = (-1)^i \varphi_i(z_1, \dots, z_n)$ なので、 $p_i(z) = b_i - c_i$ 、ゆえに、 $\frac{\partial b_i}{\partial z_j} = \frac{\partial p_i}{\partial z_j}$ 。
これらを合わせて、

$$\left(\frac{\partial p_1}{\partial z_j} \right) \frac{z^{n-1}}{-Q'(z_i)} + \cdots + \left(\frac{\partial p_{n-1}}{\partial z_j} \right) \frac{z}{-Q'(z_i)} + \left(\frac{\partial p_n}{\partial z_j} \right) \frac{1}{-Q'(z_i)} = \delta_{ij}.$$

すなわち、 $[Dp(z)]^{-1}$ の第 i 行は、 $\left[\frac{z^{n-1}}{-Q'(z_i)}, \frac{z}{-Q'(z_i)}, \dots, \frac{1}{-Q'(z_i)} \right]$ 。したがって、 $[Dp(z)]^{-1} p(z)$ の第 i 成分は、(便宜上 $b_0 = c_0 = 1$ とおき)

$$\begin{aligned} & \frac{z^{n-1}}{-Q'(z_i)}(b_1 - c_1) + \cdots + \frac{1}{-Q'(z_i)}(b_n - c_n) \\ &= \frac{z^n}{-Q'(z_i)}(b_0 - c_0) + \frac{z^{n-1}}{-Q'(z_i)}(b_1 - c_1) \cdots + \frac{1}{-Q'(z_i)}(b_n - c_n) \\ &= \frac{-Q(z_i) + f(z_i)}{Q'(z_i)} = \frac{f(z_i)}{Q'(z_i)}. \quad \square \end{aligned}$$

Newton 法の由来

- I. Newton (1643–1727) 『プリンピキア』 (1687) Kepler 方程式

$$x - \alpha \sin x = \beta.$$

- I. Newton (1669) 三次方程式

$$f(x) = x^3 - 2x - 5 = 0 \quad (\text{唯一の実根 } a = 2.09455148 \dots)$$

- ① $a = 2 + p$ として方程式へ $\rightarrow p^3 + 6p^2 + 10p - 1 = 0$
- ② p^2 や p^3 は相対的に微小であると仮定し無視して, $10p - 1 = 0 \rightarrow p = 0.1$
- ③ $p = 0.1 + q$ として方程式へ $\rightarrow q^3 + 6.3q^2 + 11.23q + 0.061 = 0$
- ④ 高次の項を無視して, $11.23q + 0.061 = 0 \rightarrow q = -61/11230 = -0.0054 \dots$
- ⑤ 結局, 近似解として $a = 2 + p + q + r = 2.09455148$ を得る.

この過程は, $x_0 = 2$ として,

$$p = x_1 - x_0 = -f(x_0)/f'(x_0), \quad q = x_2 - x_1 = -f(x_1)/f'(x_1)$$

などと同値であり, Newton 法そのものである.

Newton 法の由来

- I. Newton (1674 年, 手紙) $\sqrt[n]{A}$ ($A > 0; n = 2, 3, 4$) を求める方法として,

$$x_{k+1} = [(n-1)x_k + A/x_k^{n-1}]/n$$

を提案。これも, $f(x) = x^n - A = 0$ に対する Newton 法そのもの。

- Newton 法は, **Newton-Raphson 法**とも呼ばれる。J. Raphson (1648–1715) は,

$$x_{k+1} = x_k - f(x_k)/f'(x_k)$$

の形の反復を系統的に研究した結果をはじめて出版 (1690 年) した人である。(ただし, f や f' という記号は使わず, 多項式を具体的に書いていた。) とはいえ, Raphson は, この形の反復法は, Newton からの示唆があったことを述べている。

- Newton 法のアイデアは Banach 空間上の作用素方程式に対しても適用できる。その収束に関しては **L. Kantorovich (1912–1986)** が基礎的な仕事をして, 現在では **Kantorovich の定理**と呼ばれている。この定理は, **非線形偏微分方程式の解の一意存在の証明**で威力を発揮する。すなわち, 良い近似法は, 良い解析方法となり得るわけである。なお, Kantorovich は数学と経済学の二分野で活躍した人で, 1975 年にノーベル経済学賞を受賞している。

復習 : Gauss 型積分公式

开区間 (a, b) 上で定義された連続関数 $w(x)$ で,

$$w(x) > 0 \quad (a < x < b), \quad \int_a^b w(x) dx < \infty$$

を満たすものを取り (密度関数), 次の重み付きの定積分の近似解法を考察する.

$$Q_w(f) = \int_a^b f(x)w(x) dx$$

定義 (Gauss 型積分公式): $n \geq 1$ とする.

$$Q_{w,n}^G(f) = \sum_{i=0}^n W_i f(x_i), \quad W_i = \int_a^b w(x)L_i(x) dx \quad (0 \leq i \leq n).$$

- $a < x_0 < x_1 < \cdots < x_n < b$ は $\phi_{n+1}(x) = 0$ の根
- $\{\phi_k\}_{k \geq 0}$ は, $w(x)$ に対する直交多項式系

復習：性質

定理 I

$q(x)$ を $2n+1$ 次 (以下) の多項式とすると, $Q_{w,n}^G(q) = Q_w(q)$ が成り立つ.
これを, $Q_{w,n}^G$ は $2n+1$ 次精度 の公式であると言う.

- $Q_{w,n}^G$ は, n 次多項式近似に基づいた方法であるにも関わらず, $2n+1$ 次の多項式の積分値を厳密に計算できる. これは, **驚くべき性質**である.

定理 II

$W_i > 0 \quad (0 \leq i \leq n).$

定理 III

$\lim_{n \rightarrow \infty} Q_{w,n}^G(f) = Q_w(f).$

疑問と次のテーマ

良い公式だが, $\{x_i\}$ と $\{W_i\}$ をどうやって計算するか?

Gauss 型積分公式の実行

問題設定

区間 $(a, b) = (0, 1)$ 上で重み関数 $w(x) = 1$ を考えて, Gauss 型積分公式の標本点 $\{x_i\}$ と重み $\{W_i\}$ を計算する.

直交多項式

$$\phi_0(x) = 1,$$

$$\phi_1(x) = 2x - 1,$$

$$\phi_2(x) = 6x^2 - 6x + 1,$$

$$\phi_3(x) = 20x^3 - 30x^2 + 12x - 1, \dots$$

$\phi_2(x)$ ($n = 1$) と $\phi_3(x)$ ($n = 2$) との場合を目標にしよう.

MATLAB

以下では, 具体的な計算プログラムの例を MATLAB で示す.

Durand–Kerner 法

多項式 $\phi_{n+1}(x) = 0$ の根 x_0, \dots, x_n を求めるために, Durand–Kerner 法を用いる.
すなわち, $z^{(k)} = (z_0^{(k)}, \dots, z_n^{(k)})^T$ を,

$$z_j^{(k+1)} = z_j^{(k)} - \frac{\phi_{n+1}(z_j^{(k)})}{\prod_{j \neq i} (z_i^{(k)} - z_j^{(k)})} \quad (j = 0, \dots, n)$$

で生成する. このとき, MATLAB では, 例えば,

$$z = \begin{pmatrix} z_0 \\ z_1 \\ z_2 \end{pmatrix} \Rightarrow z - z^T = \begin{pmatrix} 0 & z_0 - z_1 & z_0 - z_2 \\ z_1 - z_0 & 0 & z_1 - z_2 \\ z_2 - z_0 & z_2 - z_1 & 0 \end{pmatrix}$$

と計算されることを利用する. すなわち, 行列 $z^{(k)} - (z^{(k)})^T + I$ の第 i 行の積がちょうど $\prod_{j \neq i} (z_i^{(k)} - z_j^{(k)})$ となる. MATLAB のコマンドとしては, `prod(A,2)` を利用すれば良い. これは, 行列 A の各行の積を成分とする列ベクトルを返すコマンドである.

Durand-Kerner 法のプログラム

Listing 1: dk1.m

```
% Durand-Kerner method
function roots = dk1(func, kmax, tol, xig)
% Newton iteration
x=xig; k=0; dif=tol+1;
len = length(x);
while k<kmax && dif>tol
    f=func(x); df = prod(x-x'+eye(len),2);
    if norm(df,inf)<1.0e-15
        error("df/dx=0");
    end
    xnew=x-f./df; dif=norm(f,inf); x=xnew; k=k+1;
end
roots = x;
end
```


重み係数の計算

重み W_0, \dots, W_n の計算には以下の関係を用いる

$$\begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & \cdots & 1 \\ x_0 & x_1 & x_2 & \cdots & x_n \\ x_0^2 & x_1^2 & x_2^2 & \cdots & x_n^2 \\ \vdots & & & \ddots & \vdots \\ x_0^n & x_1^n & x_2^n & \cdots & x_n^n \end{pmatrix} \begin{pmatrix} W_0 \\ W_1 \\ W_2 \\ \vdots \\ W_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 1/2 \\ 1/3 \\ \vdots \\ 1/(n+1) \end{pmatrix} \quad (\#)$$

Listing 2: get_weight.m

```
function weights = get_weight(nodes)
len=length(nodes);
weights=fliplr(vander(nodes))'\(1./(1:len)');
end
```

問題 2

(#) を示せ.

Gauss 型積分公式のプログラム

Listing 3: gauss.m

```
function integ = gauss(func,nodes,weights)
integ = dot(func(nodes), weights);
end
```

Listing 4: ploy2.m

```
% function for Gauss quadrature deg =2
function y = ploy2(x)
    y = (6*x.^2 - 6*x + 1)/6;
end
```

Listing 5: poly3.m

```
% function for Gauss quadrature deg =3
function y = ploy3(x)
    y = (20*x.^3 - 30*x.^2 + 12*x - 1) / 20;
end
```

例題

例題

$g(x) = -x^6 - 4x^5 + 3x^4 + 16x^3 - 11x^2 - 12x + 9$ に対して,

$$Q = \int_0^1 (1-x)\sqrt{g(x)} dx = \frac{13}{16}\pi - \frac{23}{15}$$

を計算する.

Listing 6: func45.m

```
%  
function y = func45(x)  
y = (1-x).*sqrt(-x.^6-4*x.^5+3*x.^4+16*x.^3-11*x.^2-12*x+9);  
end
```

例題の計算: $n = 1, \phi_2(x)$

```
>> Q5 = 13*pi/16 - 23/15;
>> node2 = dk1(@poly2,100,1.0e-12,rand(2,1))
node2 =
    0.788675134594813
    0.211324865405187
>> weight2 = get_weight(node2)
weight2 =
    0.5000000000000000
    0.5000000000000000
>> gauss(@func45,node2,weight2)
ans =
    1.028191591450871
>> gauss(@func45,node2,weight2) - Q5
ans =
    0.008980893742497
```

例題の計算: $n = 2$, $\phi_3(x)$

```
>> node3 = dk1(@poly3,100,1.0e-12,rand(3,1))
node3 =
    0.112701665379258
    0.887298334620742
    0.500000000000000
>> weight3 = get_weight(node3)
weight3 =
    0.277777777777777
    0.277777777777777
    0.444444444444444
>> gauss(@func45,node3,weight3)
ans =
    1.019505216742847
>> gauss(@func45,node3,weight3) - Q5
ans =
    2.945190344731952e-04
```

MATLAB について

- この講義では、計算を行う際に、数値計算システム MATLAB <https://www.u-tokyo.ac.jp/adm/dics/ja/matlabcwl.htm> を利用した。
- 現在、欧米の数値解析のテキストの計算例は、“ほとんどすべて” MATLAB とを用いて作成されている。プログラム例も MATLAB で書かれている。すなわち、**欧米の大学生は、MATLAB を用いた数値計算の経験をしている**と
思って間違いない。

MATLAB の利用

東京大学では MATLAB の包括的ライセンスを購入しているので、すべての学生は、教育用計算機システム (ECCS) 以外でも、自分のコンピュータでの利用が可能である。

- UTokyo Account を利用して **MathWorks アカウント** を取得する必要がある。そのためには、“科学の技法・東京大学「初年次ゼミナール理科」副読本 (2019 年度版)”

<https://fye.c.u-tokyo.ac.jp/students/>

の Step 4.1 **MathWorks アカウントの取得と MATLAB の利用**を参照すると良い。

- ダウンロードの方法も副読本に記されている。オンラインで利用する際には、**MathWorks アカウント**を取得した後に、

MATLAB Online <https://matlab.mathworks.com/>

にアクセスする。

レポート問題

問題 1 と問題 2 は必須である.

問題 1

p. 6 の定理をもとに, Newton 法と簡易 Newton 法のどちらが収束が速いかを考察せよ.

ヒント: $x_k \rightarrow a (k \rightarrow \infty)$ と $|x_k - a|$ が十分小さいことを仮定して, p. 6 の定理から何がわかるのかを考える.

問題 2

p. 22 の設定のもとで, (#) を示せ.

以下の問題 3 は, 選択である. 意欲のある人は挑戦してください.

問題 3

$\int_0^{\pi} \sin x \, dx = 2$ を複合 Simpson 則で計算し, 収束の速さ (h を変化させたときに誤差がどのように 0 に減衰するか?) を調べよ. p. 27 の例題について同じことを調べよ.